会議終了後提出

資料 10

日本再生医療学会/国際幹細胞学会国際シンポジウム 2021
開催結果報告

1　開催概要

(1)　会　議　名　：　（和文）日本再生医療学会/国際幹細胞学会国際シンポジウム 2021
（英文）2021 Tokyo International Symposium
(2)　報　告　者　：　日本再生医療学会理事長　岡野栄之
(3)　主　　催　：　日本再生医療学会、日本学術会議
(4)　開 催 期 間　：　2021 年 10 月 27 日（水）～ 10 月 29 日（金）
(5)　開 催 場 所　：　ハイブリッド開催（現地開催＋WEB 開催）
野村コンファレンスプラザ日本橋（東京都中央区）
GLOBAL LIFESCIENCE HUB（東京都中央区）
(6)　参 加 状 況　：　27 ヵ国・地域　379 人（国外 104 人、国内 275 人）

2　会議結果概要

(1)　会議の背景(歴史)、日本開催の経緯：

国際幹細胞学会国際シンポジウムは、国際幹細胞学会（The International Society for Stem Cell Research(ISSCR)）が世界各国の学術団体と毎年 1 回～3 回開催する国際シンポジウムであり、2013 年の第 1 回から当会議で 15 回を迎える国際シンポジウムである。この度の日本での開催は、国際幹細胞学会と日本再生医療学会において、「日本再生医療学会／国際幹細胞学会国際シンポジウム」を 2021 年 10 月開催する合意事項を設定の上、2019 年 5 月に覚書を締結し、正式最終決定された。これを受け、国際幹細胞学会は当会議プログラム委員会を編成し、日本再生医療学会は、日本開催準備のために、学会国際関係の事柄を扱う内部委員会である国際委員会を実行委員会とし、開催の準備を進めることとなった。

(2)　会議開催の意義・成果：

再生医療の主要技術は細胞開発であり、近年の幹細胞学の画期的進歩がその臨床応用として再生医療に大きく貢献している。特にわが国においては、これらの基礎研究のレベルは世界屈指であり、最近の幹細胞学、細胞移植技術や培養関連技術の進歩によって再生医療は臨床応用の段階に至っており、さらに日本再生医療学会員である山中伸弥教授の 2012 年の iPS 細胞（人工多能性幹細胞）に対するノーベル賞受賞は、全世界の再生医療への期待に一層の拍車が掛けているところである。この会議を日本で開催することは、わが国の再生医療研究・技術及び再生医療に特化した日本独自の規制、社会実装に対する取り組みを全世界の研究者に大きくアピールし、わが国の再生医療分野の研究を一層発展させるとともに、細胞流通などの国際標準化について、世界での再生医療の質の向上に貢献することが期待される。

(3)　当会議における主な議題（テーマ）：

この度の日本再生医療学会／国際幹細胞学会 国際シンポジウムでは、「基礎研究から臨床応用へ」をメインテーマに、最新の再生医療（幹細胞）研究、再生医療等に関する規制、再生医療の社会実装などを主要課題とした研究発表と討論が行われた。

(4)　当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割：
わが国の再生医療研究・技術及び再生医療に特化した日本独自の規制、社会実装に対する取り組みを全世界の研究者に大きくアピールし、わが国の再生医療分野の研究を一層発展させるとともに、細胞流通などの国際標準化について、世界での再生医療の質の向上に貢献した。

(5)　次回会議への動き：本シンポジアは各回ごとに異なったテーマが設定され、開催されている。今後、日本での開催の可能性の高い iPS 細胞関連やオルガノイドなどのテーマが選出された際には、実績も含めてわが国が優位に立てることが想定できる。

(6)　当会議開催中の模様：
新型コロナウイルス感染拡大にともない、完全 WEB 開催で準備を進めていたが、日本国内の感染状況に伴い、急遽ハイブリッド開催とした。日本国内参加者は日本橋の会場から参加し、WEB 配信プラットフォームを通じて、国内外を含めた活発な討議が行われた。

3　市民公開講座結果概要

(1)　開催日時：10 月 30 日（土）13:00～15:00
(2)　開催場所：WEB 開催
(3)　主なテーマ、サブテーマ：基礎研究から臨床応用へ
(4)　参加者数、参加者の構成：398 名（一般市民）

(5)　開催の意義：
山中伸弥教授の iPS 細胞の発見で一躍有名になった「幹細胞」。その幹細胞研究に関する国際的なシンポジウムを、国際幹細胞学会と日本再生医療学会・日本学術会議が共同で開催するタイミングに合わせ、幹細胞研究がどのように人の治療に発展していくか、広く市民にお伝えするために市民公開講座を開催した。

(6)　社会に対する還元効果とその成果：
現在承認されている iPS 細胞の臨床研究のほとんどが日本で行われており、日本は幹細胞の臨床応用において重要な位置を占めてる。2014 年には「再生医療等安全性確保法」が施行され、自費診療や臨床研究の手続きが定められた。また、同年の「医薬品医療機器等法」の施行により、日本は世界で初めて再生医療製品の条件付・期限付承認制度を確立し、国を挙げて再生医療の社会実装を推進している。このように、基礎的な幹細胞研究から始まり、遂に臨床応用が加速し始めた再生医療（幹細胞）研究について、最新の科学研究の成果のみならず、いかに再生医療を普遍的治療法として社会実装して行くかといった様々な視点を紹介した。

4　日本学術会議との共同主催の意義・成果

日本学術会議との共同開催となったことから、日本学術会議を通じての広報活動により、多くの参加者を得ることができた。また、オープニングセレモニーでは内閣総理大臣からメッセージもいただき、参加者にとって印象の残る会議とすることができた。本シンポジウムの開催により、再生医療に関する研究者が活発な意見交換を行うことができたことは、今後わが国の再生医療のさらなる発展に大きな影響を与えたものと考える.